

『アイヌ神謡集』に掲載されたカムイユカラについての考察

—修辞論的視点より—

Consideration about *kamui-yukar* published at "Ainu shin-yo syu"

—The viewpoint of rhetorical theory—

大喜多 紀明

アジア民族文化学会

Noriaki Ohgita

Association of Asian Folk Culture Studies

キーワード：アイヌ，文化，交差対句，口承文芸

Key words：Ainu, Culture, Chiasmus, Oral literature

抄録

本稿では、知里幸恵が編集・翻訳した『アイヌ神謡集』^[1]に掲載されている13編のカムイユカラの内の5編をテキストとし、それらに見出される交差対句を紹介している。本稿における前提は、交差対句が、アイヌ民族における特徴的な修辞表現様式一つであるということである。本稿で紹介した交差対句の資料は、アイヌの生活文化を理解する際に有用な知見であると筆者は判断している。

1. はじめに

本稿は、知里幸恵氏（以下敬称略）によって編集・翻訳された『アイヌ神謡集』に掲載されているカムイユカラ（神謡）の中の5編をテキストとし、これらに表出された交差対句構造を紹介している。なお、交差対句が、アイヌ民族における特徴的な修辞表現様式一つであるということが本稿の前提である^[2]。

交差対句は修辞技法の一つである。例えば、対応関係にある一連の「語」・「句」・「節」などが同心円状に配列する形式を、本稿では交差対句としている。

$$A \rightarrow B \rightarrow C \rightarrow D \rightarrow D' \rightarrow C' \rightarrow B' \rightarrow A$$

この交差対句という呼称については、一般的に定まったものではなく、場合によっては交錯配列やキアスムスなどとも呼ばれる。本稿では、便宜上、交差対句を採用した。

一般的に、人々が、その生活の中で培われる心性は、容易に、表出される言語文化の形態に反映する。筆者は、アイヌの口頭資料の構文に表出する修辞表現法に着目し、「語り」の構造とアイヌ民

族の心性との関わりを調べている^[2]。

筆者の一連の論文[2,3,4,5]で紹介しているように、アイヌ構文に表出する交差対句はアイヌの民俗的な修辞技法であり、この技法についての研究が、アイヌの生活的伝統に近接した言語形態を習得する上でのアプローチの一つとなり得る。本稿の目的は、本稿でテキストとした、知里による5編のカムイユカラに確認される交差対句の資料を提示することにある、それに加えて、若干の考察を記している。

2. テキストについて

知里による『アイヌ神謡集』には合計13編のカムイユカラが収録されている。収録されているカムイユカラの題名を次の①～⑬に列挙する。

- ① 梟の神の自ら歌った謡「銀の滴降る降るまわりに」
- ② 狐が自ら歌った謡「トワトワト」
- ③ 狐が自ら歌った謡「ハイクンテレケ ハイコシテムトリ」
- ④ 兎が自ら歌った謡「サンパヤ テレケ」
- ⑤ 谷地の魔神が自ら歌った謡「ハリツ クンナ

- ⑥小狼の神が自ら歌った謡「ホテナオ」
- ⑦梟の神が自ら歌った謡「コンクワ」
- ⑧海の神が自ら歌った謡「アトイカ トマトマ
キ クントテアシ フム フム！」
- ⑨蛙が自らを歌った謡「トーロロ ハンロク
ハンロク！」
- ⑩小オキキリムイが自ら歌った謡「クツニサ
クトクトン」
- ⑪小オキキリムイが自ら歌った謡「この砂赤い
赤い」
- ⑫瀬が自ら歌った謡「カップ レウレウ カッ
パ」
- ⑬沼貝が自ら歌った謡「トヌペカ ランラン」

筆者による以前の論文では、②・④・⑩^[3,4]、⑤^[5]に確認される交差対句が示されている。本稿で紹介する交差対句は、②・⑥・⑨・⑪・⑬のものである。なお、②については前稿^[3,4]でも述べたが、本稿は、より詳細に記している。

本稿でテキストとしたカムイユカラの話者である知里は、1903年6月8日に生まれ、北海道登別市で育ったアイヌ民族である。当時、日本政府の施策などの影響によって、アイヌ文化は急速に和人文化に吸収される方向へと進んだ。それによって、アイヌ民族でありながらも日常的にはアイヌ語を使わず、生活形態においても従来の伝統的なアイヌとしての習俗の中で生活する人々は激減しつつあった^[6]。こうした歴史的な背景の下、知里自体は、当時、辛うじて残存していたアイヌ民族としての伝統的生活の中で育ち、卓越したアイヌ口承話者であった祖母、金成モナシノウク氏から多くのアイヌ口承文芸を継承した。知里によるカムイユカラは『アイヌ神謡集』に掲載されており、かつ、記録として残された口承の中では、最も古い部類のものである。

本稿では、テキストとした5編のカムイユカラについて、はじめに『アイヌ神謡集』に記載された文章を転載している。この時、筆者による多くの下線と記号が施してある。次に、筆者による「あらすじ」を記し、続いて、確認される交差対句形式の紹介と若干の考察という順序で記載している。

なお、通常、カムイユカラの場合は、「サケヘ」と呼ばれるリフレインが多く挿入されるのであるが、知里の場合、冒頭箇所以外の「サケヘ」が概ね省略されている。本稿は、知里の文章に準じているため、『アイヌ神謡集』における記述と同様に、

基本的には「サケヘ」が省略されている。

3. 狐が自ら歌った謡「トワトワト」の場合

本節では、②狐が自ら歌った謡「トワトワト」(以下、「トワトワト」とする。)について採り上げる。

3.1. 「トワトワト」の構造

はじめに、『アイヌ神謡集』に掲載された「トワトワト」の全文を記載する。なお、各行頭には行番号を施しており、テキストには筆者による記号・傍線が付されている。

- 1 A トワトワト
- 2 ある日に海辺へ食物を拾いに
- 3 出かけました。
- 4 B 石の中ちやらちやら
- 5 木片の中ちやらちやら
- 6 行きながら自分の行手を見たところが
- 7 海辺に鯨が寄り上って
- 8 人間たちがみんな盛装して
- 9 海幸をば喜び舞い海幸をば喜び躍り肉を切る者運ぶ者が
- 10 行き交って重立った人たちは海幸をば謝し
- 11 拝む者
- 12 刀をとぐ者など浜一ぱいに黒く見えます。
- 13 私はそれを見ると大層喜びました。
- 14 「ああ早くあそこへ着いて
- 15 少しでもいいから貰いたいものだ」と
- 16 思っ**て**「ばんざーい！ ばんざーい」と
- 17 叫びながら
- 18 石の中ちやらちやら
- 19 木片の中ちやらちやら
- 20 行って行って近くへ行って見ましたら
- 21 ちっとも思いがけなかったのに
- 22 鯨が上ったのだとばかり思ったのは
- 23 浜辺に犬どもの便所があ**っ**て
- 24 大きな糞の山があります、
- 25 それを鯨だと私は思**っ**たので
- 26 あり**ま**した。
- 27 人間たちが海幸をば喜んで躍り海幸をば
- 28 喜び舞い
- 29 肉を切ったりはこんだりしているのだと
- 30 私が思**っ**たのはからすどもが
- 31 糞をつつき糞を散らし散らし
- 32 その方へ飛びこの方へ飛びしているの**で**

- した。
- 31 私は腹が立ちました。
- 32 「眼の曇ったつまらない奴
- 33 眼の曇った悪い奴
- 34 尻尾の下の臭い奴
- 35 尻尾の下の腐った奴
- 36 お尻からやにの出る奴
- 37 お尻から汚い水の出る奴
- 38 なんという物の見方をしたのだろう。」
- 39 C それからまた
- 40 石の中ちゃらちゃら
- 41 木片の中ちゃらちゃら
- 42 海のそばから走りながら
- 43 見たところが私の行手に
- 44 舟があつてその舟の中で
- 45 人間が二人互にお悔みをのべています、
- 46 「おや、何の急変が
- 47 あるのでああいう事をしているのだろう、
- 48 舟と一しょに引繰かえった人でもあるの
- 49 ではないかしら、
- 50 とおお早くずっと近くへ行って
- 51 人の話を聞きたいものだ。」
- 52 と思うのでフオホホーイと
- 53 高く叫んで
- 54 石の中ちゃらちゃら
- 55 木片の中ちゃらちゃら
- 56 飛ぶようにして行って見たら
- 57 舟だと思ったのは浜辺にある
- 58 岩であつて、人だと思ったのは
- 59 二羽の大きな鶺鴒であつたのでした。
- 60 二羽の大きな鶺鴒が長い首をのぼしたり縮め
- 61 たり
- 62 しているのを悔みを言い合っている様に
- 63 私は見たのでありました。
- 64 「眼の曇ったつまらない奴
- 65 眼の曇った悪い奴
- 66 尻尾の下の臭い奴
- 67 尻尾の下の腐った奴
- 68 お尻からやにの出る奴
- 69 お尻から汚い水の出る奴
- 70 なんという物の見方をしたのだろう。」
- 71 C それからまた
- 72 石の中ちゃらちゃら
- 73 木片の中ちゃらちゃら
- 74 飛ぶ様にして川をのぼって行きましたとこ
- ろが
- 75 ずーっと川上に女が二人
- 76 浅瀬に立っていて泣き合っています。
- 77 私はそれを見てビックリして
- 78 「おや、なんの悪い事があつて
- 79 なんの凶報が来てあんなに泣き合つて
- 80 いるのだろう？
- 81 ああ早く着いて人の話を
- 82 聞きたいものだ。」
- 83 と思つて
- 84 石の中ちゃらちゃら
- 85 木片の中ちゃらちゃら
- 86 飛ぶ様にして行って見たら
- 87 川の中程に二つの築があつて
- 88 二つの築の杭が流れにあたつてグラグラ動
- 89 いているのを
- 90 二人の女がうつむいたり仰むいたりして
- 91 泣き合っているのだと私は思ったの
- 92 でありました。
- 93 「眼の曇ったつまらぬ奴
- 94 眼の曇った悪い奴
- 95 尻尾の下の臭い奴
- 96 尻尾の下の腐った奴
- 97 お尻からやにの出る奴
- 98 お尻から汚い水の出る奴
- 99 なんという物の見方をしたのだろう。」
- 100 B それからまた、川をのぼつて
- 101 石の中ちゃらちゃら
- 102 木片の中ちゃらちゃら
- 103 飛ぶようにして帰つて来ました。
- 104 自分の行手を見ましたところが
- 105 どうしたのだから
- 106 私の家が燃えあがつて
- 107 大空へ立ちのぼる煙は
- 108 立ちこめた雲の様です。それを見た私は
- 109 ビックリして気を失うほど
- 110 驚きました。女の声⁽⁷⁾で叫びながら
- 111 飛び上りますと、むこうから誰かが
- 112 大きな声でホーイと叫びながら私のそばへ
- 113 飛んで来ました。見るとそれは私の妻で
- 114 ビックリした顔色で息せききつて、
- 115 「旦那様どうしたのですか？」
- 116 と云うので、見ると
- 117 火事の様に見えたのに
- 118 私の家はもとのまま
- 119 たっています。火もなし、煙もありません。

- 117 それは、私の妻が搗物をしていると
 118 その時に風が強く吹いて簸ている粟の糠が
吹き飛
 119 されるさまを
 120 煙の様に私は見たのであります。
 121 A´ 食物を探しに出かけても食物も見付か
らず、その上に
 122 また、私が大声を上げたので私の妻が
 123 れに驚いて簸ていた粟をも
 124 簸と一しょに放り飛ばしてしまったので
 125 今夜は食べる事も出来ません
 126 私は腹立たしくて床の底へ
 127 身を投げて寝てしまいました。
 128 「眼の曇ったつまらぬ奴
 129 眼の曇った悪い奴
 130 尻尾の下の臭い奴
 131 尻尾の下の腐った奴
 132 お尻からやにの出る奴
 133 お尻から汚い水の出る奴
 134 なんという物の見方をしたのだろう。」と狐
の頭（かしら）が物語りました。

3.2. あらすじ

「トワトワト」では「狐の頭（かしら）」が主人公である。また、謡における「一人称」はこの「狐」である。「トワトワト」のあらすじは以下の通りである。

【あらすじ】

——狐は食べ物を探しに家を出かけた。はじめに浜へ行ってみると、海岸に「鯨」が打ち上げられている。しかし、近くまで行ってみると、「鯨」だと思ったものは「糞の山」だった。続いて海辺を走っていると、二人の人が舟の中でお悔みをのべている様子が見えた。しかし実際に近づいてみると、岩の上にいる二羽の鶺鴒であった。今度は川を上っていくと、二人の女が川の浅瀬で泣きあっている様子が見えた。しかし、近づいて見ると、二つの築の杭がグラグラとゆれているだけだった。そして狐が家に帰っていくと、家が燃えて煙がでていた様子を見つけた。狐は驚いて「女の叫び方」で叫ぶと、その声を聞いた狐の妻が狐の元へ、慌てて走ってきた。ところがその時に、妻はビックリして、簸（ひ）ていた粟を放り出してしまったのである。さて、狐が煙と認識したものは、実は、妻の簸ている粟の糠が吹き飛ばされる様であったの

だ。結局、狐は家に帰っても食べ物が無いので寝てしまった。——

3.3. 交差対句と考察

この「トワトワト」は、次に示すように、交差対句を主軸的な修辞法としている。

A 食べ物を探しに家を出る狐

B 鯨が浜に打ち上げられている

↓ [近づいてみると・・・]

犬の糞であった

C 浜辺で舟に二人の人間がお悔みをしている

↓ [近づいてみると・・・]

岩に二羽の鶺鴒がいて首を伸縮させていた

C´ 川の浅瀬で二人の女が泣き合っている

↓ [近づいてみると・・・]

二つの築の杭がぐらぐらと揺れていた

B´ 家から大空へ立ちのぼる煙

↓ [近づいてみると・・・]

粟の糠が吹き飛ばされるさまだった

A´ 家に帰っても食べ物が無い狐

A には、狐が食べ物を探すために家を出かける様子が書かれている。それに対し、A´ には、家に帰って来ても食べ物が無い狐の様子が書かれている。

続く B では、狐が、浜辺に打ち上げられた鯨を発見する。しかし、実際にその場所に狐が近づいて見ると、鯨のように見えたものは犬の糞の山であった。それに対応する B´ には、粟の糠が吹き飛ばされる様を、煙が立ち昇る様と勘違いする狐の姿が描写されている。ここでの B・B´ の関係を整理してみると次のように表現できる。

【場所】 【移動】 【食べ物】

B : 浜 海→陸 鯨 (大きい)

B´ : 陸 陸→空 粟 (小さい)

まず、B と B´ の「場所」についてみてみると、それぞれ浜と陸という対照的な「場所」である。また、B では、海から浜に上がった鯨が描かれている。それに対し、B´ では、地上から空中へと立ち昇る煙が描かれている。ここでは、事物が「海」から「陸」へ、一方では「陸」から「空」へと移動する様子が対比的に描写されている。さらに、「食べ物」についてみてみると、「鯨」と「粟」と

いう、大きさにおいて対極的な二種類の「食べ物」がそれぞれ配置されていることがわかる。

C と C' については、次のような関係性を見出すことができる。

【場所】【見えたもの】【様子】 【首の動き】【正体】

C : 浜辺 二人の人 お悔み 伸縮 二羽の鶴

C' : 川上 二人の女 泣き合う 俯仰 二つの築の杭

C と C' の出来事があった「場所」はそれぞれ浜辺と川上である。C での浜辺は「川下」に相当する一方で、C' は「川上」での出来事である⁷⁾。したがって、両者は対照的な場所である⁸⁾。また、狐が見えたものは「二人の人」と「二人の女」であり、これも対比的である。また、狐が見たものの「様子」についても、「お悔み」と「泣き合うこと」で類似している。さらに、狐が見た「人々」は、「伸縮」と「俯仰」で異なるのだが、共に首を動かしているという点では一致している。

4. 小狼の神が自ら歌った謡「ホテナオ」の場合

本節では、⑥小狼の神が自ら歌った謡「ホテナオ」(以下、「ホテナオ」とする。)の場合である。

4.1. 「ホテナオ」の構造

以下、「ホテナオ」の全文を引用転記する。下線・記号・行頭の番号は筆者による。

- 1 A ホテナオ
- 2 ある日に退屈なので浜辺へ出て、
- 3 遊んでいたら一人の小男が
- 4 来ていたから、B①川下へ下ると
- 5 私も川下へ下り、
- 6 川上へ来ると私も川上へ行き道をさえぎった。
- 7 すると川下へ六回
- 8 川上へ六回になった時②小男は
- 9 ③持前の癩癩を顔に表して言うことには、
- 10 「④ピイピイ
- 11 Cこの小僧め悪い小僧め、そんな事をするなら
- 12 この岬の、昔の名と今の名を
- 13 言い解いて見ろ」
- 14 私は聞いて笑いながらいうこと
- 15 には、
- 16 「誰がこの岬の昔の名と

- 17 今の名を知らないものか！
- 18 昔は、尊いえらい神様や人間が居ったから
- 19 この岬を神の岬と
- 20 言ったものだが、今は時代が衰えたから
- 21 御幣の岬とよんでいるのさ！」
- 22 云うと、小男の云うことには、
- 23 「ピイトン、ピイトン
- 24 Dこの小僧め本当にお前はそういうなら
- 25 この川の前の名と今の名を
- 26 云って見ろ。」
- 27 聞くと、私の云うことには、
- 28 「誰がこの川の前の名
- 29 今の名を知らないものか！
- 30 昔、えらかった時代にはこの川を
- 31 流れの早い川と云っていたのだが
- 32 今は世が衰えているので流れの遅い川と
- 33 云っているのさ。」
- 34 云うと小男の云うことには、
- 35 「ピイトントン、ピイトントン
- 36 E本当にお前そんな事を云うなら
- 37 お互の素性の解き合いをやるう。」
- 38 E'聞いて私の云うことには、
- 39 「誰がお前の素性を知らないものか！
- 40 D'大昔、オキキリムイが山へ行って
- 41 狩猟小舎を建てた時、榛の木の炉縁を作った
- 42 ら
- 43 その炉縁が火に当ってからからに乾いてしま
- 44 った。
- 45 オキキリムイが片方を踏むと片一方が
- 46 上る、それをオキキリムイが怒って
- 47 その炉縁を川へ持って下り
- 48 捨ててしまったのだ。
- 49 C'それからその炉縁は流れに沿うて流れて
- 50 いって
- 51 海へ出で、彼方の海波、此方の海波
- 52 に打ちつけられる様を神様たちが御覧にな
- 53 って、
- 54 敬うべきえらいオキキリムイの手作りの物
- 55 がその様に
- 56 何の役にもたたず迷い流れて海水と共に腐
- 57 ってしまうのは
- 58 勿体ない事だから神様たちから
- 59 その炉縁は魚にされて、
- 60 炉縁魚と
- 61 名づけられたのだ。
- 62 B①'ところがその炉縁魚は、自分の素性が

- 57 わからないので、人にばけてうろついている。
 58 その炉縁魚がお前なのさ。」
 59 云うと、②「小男は③「顔色を
 60 変え変え聞いていたが
 61 「④「ピイトントン、ピイトントン！」
 62 A「お前は、小さい、狼の子なの
 63 さ。」
 64 云い終ると直ぐに海へパチャンと飛び込ん
 65 だ。
 65 あと見送ると一つの赤い魚が
 66 尾鰭を動かしてずーっと沖へ
 67 行ってしまった。
 68 と、幼い狼の神様が物語りました。

4.2. あらすじ

「ホテナオ」は、「幼い狼の神様」が主人公である。物語のあらすじとしては次のようである。

〔あらすじ〕

——幼い狼の神が浜辺で遊んでいると、一人の小男が現れた。狼は、小男を避けるために川上・川下と何度も移動するが、小男はついてくる。小男は癩癩を起し、狼に、岬と川についての昔と今の名前を質問してきた。それに対して、狼は難なく答える。すると今度は、小男が、互いの素性の解きあいをやろうという。しかし、ここでも狼は、小男の素性を簡単に解いてしまう。素性を解かれた小男は、狼の素性を言うとすぐに、赤い魚となって沖へと泳いでいった。——

4.3. 交差対句と考察

このテキストに付された下線・記号部分をまとめ、配列すると次のようになる。

- A 行く手を遮る小男
 B① 六回まで遮る
 ② 小男
 ③ 癩癩を顔に表す
 ④ ピイピイ
 C 神の岬→御幣の岬 【海】
 D 流れの速い川→流れの遅い川 【川】
 E 素性の解きあいをやろう
 E「誰がお前の素性を知らないものか！」
 D「炉縁→廃棄された 【川】
 C「炉縁→魚 【海】
 B①「人に化けてうろついている

- ②「小男
 ③「顔色を変える
 ④「ピイトントン
 A「魚が沖へ行ってしまふ

ここで、Aには、「狼」が「小男」と出会う場面が書かれているのに対し、A「では、「魚」になった「小男」が「狼」のもとを去っていく場面である。

続くBとB「の関係では、B①に書かれた「六回まで遮る」ことは、B①「の「人に化けてうろついている」ことと同じ意味である。B②とB②「には、共に、「小男」が配置されている。また、B③の「癩癩を顔に表す」とB③「の「顔色を変える」は、両方とも、顔の表情を変化させることを意味する点で共通している。さらに、B④とB④「の「ピイピイ」と「ピイトントン、ピイトントン！」については、実質的には同じである。

Cには、「小男」の問いかけに対して「狼」が答える場面が書かれている。「狼」は、岬について、昔は「神の岬」と呼ばれ今は「御幣の岬」と呼ばれると解く。ここで、岬は、海に突き出た陸部を指す。一方、C「には、「炉縁」が海へと流れてゆき、その「炉縁」を神々が「魚」に変える場面である。ここで、CとC「に共通することは、舞台が「海」にまつわるという点である。

また、Dも、「小男」の問いかけに対して「狼」が答える場面である。「狼」は、川について、昔は「流れの速い川」であったが、今は「流れの遅い川」と呼ばれると解いた。一方、D「には、からからに乾いた「炉縁」を川に投げ込んで捨てる場面が描かれている。ここで、DとD「に共通する事柄は、舞台が「川」にまつわるという点である。

そして、Eでは、「小男」が「狼」に対して「素性の解きあいをやろう」と問いかけているのに対し、E「には「狼」の答え「誰がお前の素性を知らないものか！」が書かれている。

5. 蛙が自らを歌った謡「トーロロ ハンロク ハンロク！」の場合

本節では、⑨蛙が自らを歌った謡「トーロロ ハンロク ハンロク！」(以下、トーロロ ハンロク ハンロク!)とする。)を採り上げる。

5.1. 「トーロロ ハンロク ハンロク！」の構造次に、「トーロロ ハンロク ハンロク！」の全文

を転記する。なお、各行頭には行番号を施しており、テキストには筆者による記号・下線が付されている。

- 1 A トーロロ ハンロク ハンロク!
- 2 「ある日に、草原を飛び廻って
- 3 遊んでいるうちに」と見ると、
- 4 B 一軒の家があるので戸口へ行って
- 5 見ると、家の内に C 宝の積んである側に
- 6 高床がある。その高床の上に
- 7 一人の若者が鞆を刻んでうつむいて
- 8 いたので、私は悪戯をしかけようと思って敷
- 9 居の上に
- 10 坐って、D「トーロロ ハンロク ハンロク！」
- 11 と
- 12 鳴いた、ところが、彼の若者は刀持つ手を上
- 13 げ
- 14 私を見ると、ニッコリ笑って、
- 15 「それはお前の謡かえ? お前の喜びの歌か
- 16 え?
- 17 もっと聞きたいね。」というので
- 18 E 私はよるこんで「トーロロ ハンロク ハン
- 19 ロク!」と
- 20 鳴くと、彼の若者のいう事には、
- 21 「それはお前のユーカラかえ? サケハウか
- 22 え?
- 23 もっと近くで聞きたいね。」というので
- 24 F 私はよるこんで「トーロロ ハンロク ハン
- 25 ロク!」と
- 26 鳴くと、彼の若者のいうことには、
- 27 「それはお前のユーカラかえ? サケハウか
- 28 え?
- 29 もっと近くで聞きたいね。」それを聞くと D
- 30 私、
- 31 本当に嬉しくなって、上座の方の炉縁の
- 32 隅のところへピョンと飛んで
- 33 「トーロロ ハンロク ハンロク!」と鳴いた
- 34 ら
- 35 突然!彼の若者がパッと起ち
- 36 上ったかと思うと、大きな薪の燃えさしを
- 37 取り上げて私の上へ投げつけた音は
- 38 体の前がふさがったように思われて、それっ
- 39 きり
- 40 どうなったかわからなくなってしまった。

- 32 ふと気がついて見たら
- 33 C「芥捨場の末に、一つの腹のふくれた蛙が
- 34 死んでいて、その耳と耳との間に私はすわっ
- 35 ていた。
- 36 B「よく見ると、ただの人間の家
- 37 だと思ったのは、オキキリムイ、神の様に
- 38 強い方の家なのであった、そして
- 39 オキキリムイだという事も知らずに
- 40 私が悪戯をしたのであった。
- 41 A「私はもう今この様につまらない死方、悪
- 42 い死方
- 43 をするのだから、これからの
- 44 蛙たちよ、決して、人間たちに悪戯をするの
- 45 ではないよ。
- 46 と、ふくれた蛙が云いながら死んでしまった。

5.2. あらすじ

「トーロロ ハンロク ハンロク!」は、「蛙」が主人公である。また、文中の「一人称」は「蛙」である。物語のあらすじとしては次のようである。

【あらすじ】

——蛙は野原で飛び回り遊んでいた。蛙は、一軒の家を発見する。蛙がその家の中をのぞき込むと、うつむいて鞆を刻んでいる若者の姿が見えた。蛙はその若者に「悪戯」を仕掛けるため、敷居の上に座って鳴いた。若者はその蛙の鳴き声を聞くと、その声に関心を持つ素振りをし、蛙を近くに寄せた。しかし、いざ、蛙が近づいてくると、突然、若者は薪の燃えさしを蛙に投げつけて殺してしまったのである。実は、この若者の正体は「オキキリムイ」であった。そして、殺された蛙は、「蛙たち」に対し、人間たちに「悪戯」をしてはいけないという戒めの言葉を伝えたのである。——

34 行目に書かれている「耳と耳との間に私はすわっていた」という表現は、常套的に使われる表現である。蛙はオキキリムイに殺される。そして、死んだ蛙の「ラマツ(魂)」は、はじめは「耳と耳との間」に座ることになる。これに類する事例は、他の謡にも確認できる。例えば、「谷地の魔神が自ら歌った謡『ハリツ クンナ』でも、谷地の魔神である龍がオキキリムイに殺され、「耳と耳との間」に座る場面が描かれている。

最後は、殺された蛙が、「蛙たち」に対して「悪

戯をしてはいけない」という「教訓の言葉」を述べる場面となる。このように、最後に「教訓の言葉」が配置される事例は多くのカムイユカラに確認される、言わば、典型的なパターンである。

5.3. 交差対句と考察

この「トーロロ ハンロク ハンロク！」に施した記号・下線箇所にしたがって配列すると次のように表現できる。

- A 草原で遊ぶ蛙
- B 一軒の家
- C 敷居に座る蛙（悪戯を仕掛ける）
- D 蛙を招く若者
- E ユーカラかえ？ サケハウかえ？
- E' ユーカラかえ？ サケハウかえ？
- D' 蛙を殺す若者
- C' 耳と耳の間に座る蛙（悪戯に対する報い）
- B' 家の正体
- A' 死んだ蛙

AとA'には蛙の様子が描かれている。Aでは、蛙が草原で遊ぶ姿が書かれているのに対し、A'には、死んでしまった蛙の姿が書かれている。両箇所における蛙の姿は対照的である。

B・B'については、共に、「オキキリムイ」の家についての記述である。Bでは、蛙が家を発見するが、その家がオキキリムイの家であることをその蛙は知らない。それに対し、B'には、その家の正体が書かれている。実は、その家はオキキリムイの家だったのである。

Cには、家の中に入り、敷居の上に座る蛙の様子が書かれている。蛙が家に侵入しようとした目的は、若者に悪戯をすることであった。それに対して、C'には、悪戯の報いを受け、オキキリムイに殺されてしまう蛙の姿がある。蛙は殺され、「耳と耳との間」に座ることになる。CとC'では「敷居」と「耳と耳との間」という、蛙が座っている場所どうしで対応しており、同時に、「悪い行い」とそれに対する「報い」との対応でもある。

Dには、悪戯をする蛙に対して笑うオキキリムイの姿が描かれているが、一方のD'には、逆に、喜ぶ蛙を殺すオキキリムイが描かれている。

【蛙の様子】

D : 悪戯する

【オキキリムイの様子】

蛙に笑いかける

× [交錯]

D' : 喜ぶ 蛙を殺す

ここでDには、悪戯を仕掛けようとする蛙に対して笑顔で対応するオキキリムイの姿が描かれているが、D'では、逆に、喜ぶ蛙と、その蛙を殺すオキキリムイとなっている。このように、DとD'では、蛙とオキキリムイの状況が交錯し、両者の立場が逆転している。

また、EとE'は、悪戯を仕掛けてきた蛙に気がついたオキキリムイが、その蛙を安心させておびき寄せる過程が書かれた箇所である。EとE'とを対比してみると、概ね同じ言葉を再現していることが確認できる。

以上のように、「トーロロ ハンロク ハンロク！」の構造を俯瞰的に見ると、構造的なレベルでの交差対句が、物語の骨格的な修辞法となっていることがわかる。取り分け、折り返しの箇所の「前」と「後」に書かれた出来事は極めて対照的である。

6. 小オキキリムイが自ら歌った謡「この砂赤い赤い」の場合

本節は、⑩小オキキリムイが自ら歌った謡「この砂赤い赤い」（以下、「この砂赤い赤い」とする。）の場合である。

6.1. 「この砂赤い赤い」の構造

以下、『アイヌ神謡集』に掲載された「この砂赤い赤い」の全文を記載する。ここでも、各行頭には行番号を施しており、テキストには筆者による記号・傍線が付されている。

- 1 A [この砂赤い赤い]
- 2 ある日に流れをさかのぼって遊びに
- 3 出かけたら、悪魔の子に出会った。
- 4 いつでも悪魔の子は様子が美しい
- 5 顔が美しい。黒い衣を着けて胡桃の小弓に胡桃の小矢を持っていた
- 6 私を見ると、ニコニコして
- 7 いうことには、
- 8 「小オキキリムイ、遊ぼう。」
- 9 B⑩さあこれから、魚の根を絶やして見せよう。」
- 10 と言って、胡桃の小弓に胡桃の小矢を番え水源の方へ矢を射放すと、

- 11 水源から胡桃の水、濁った水が
 12 流れ出し、鮭どもが上って来ると
 13 胡桃の水が厭なので泣きながら
 14 引き返して流れて行く。悪魔の子は
 15 それをニコニコしている。
 16 ②私はそれを見て腹が立ったので
 17 私の持っていた、銀の小弓に銀の小矢を
 18 番え水源へ矢を射はなすと
 19 水源から銀の水、清い水が
 20 流れ出し、泣きながら流れて行った
 21 鮭どもは清い水に元気を回復し
 22 大笑いをして遊びさわいで
 23 パチャパチャ川を上って行った。
 24 ③すると、悪魔の子は、持前の癩癩を
 25 顔に表して、
 26 B①「本当にお前そんな事をするなら、鹿
の根を
 27 絶やして見せよう。」と云って、
 28 胡桃の小弓に胡桃の小矢を番え
 29 大空を射ると、山の木原から
 30 胡桃の風、つむじ風が吹いて来て
 31 山の木原から、牡鹿の群は別に
 32 牡鹿の群はまた別に、風に吹き上げられ
 33 ずーっと天空へきれいにならんで上って行
く。
 34 悪魔の子はニコニコしている。
 35 ②「それを見た私はかっとう癩にさわったの
で
 36 銀の小弓に銀の小矢を
 37 番えて、鹿の群のあとへ矢を射放すと、
 38 天上から、銀の風、清い風が
 39 吹き降り、牡鹿の群は
 40 別に、牡鹿の群はまた別に、
 41 山の木原の上へ吹き下された。
 42 ③「すると、悪魔の子は
 43 持前の癩癩を顔に現し、
 44 「生意気な、本当に
 45 お前そんな事をするなら、力競べをやろう。」
 46 と云いながら上衣を脱いだ。
 47 私も薄衣一枚になって
 48 組み付いた。彼も私に組み付いた。A「それ
からは
 49 互に下にしたり上にしあったり相撲をとっ
たが、
 50 大へんに悪魔の子が力のある事には
 51 驚いた。けれども、とうとう、ある時間に、

- 52 私は腰の力、からだの力を
 53 みんな出して、悪魔の子を
 54 肩の上まで引っ担ぎ、
 55 山の岩の上へ彼を打ちつけた音が
 56 がんと響いた。殺してしまつて地獄へ
 57 踏み落したあとはしんと静まり返つた。
 58 それが済んで、私は流れに沿って帰つて来る
と、
 59 川の中では鮭どもが笑う声
 60 遊ぶ声がかまびすしくのぼつて来るのが
 61 パチャパチャきこえる。山の木原では、
 62 牡鹿ども、牡鹿どもが笑う声
 63 遊ぶ声がそこら一ぱいになって
 64 そこにここに物を
 65 食べている。私はそれを見て
 66 安心をし、私の家へ
 67 帰つて来た。
 68 と、小さいオキキリムイが物語つた。

6.2. あらすじ

「この砂赤い赤い」は、「小さいオキキリムイ」が主人公である。

〔あらすじ〕

——「小さいオキキリムイ」が川をさかのぼっていくと「悪魔の子」に出会った。「悪魔の子」は「小さいオキキリムイ」と遊ぼうと声をかける。はじめに、「悪魔の子」は、胡桃の矢を川の上流に放ち、川を濁らせた。それを嫌った魚たちは川を遡らず逃げていく。それを見て、「悪魔の子」は喜んだ。しかし、「小さなオキキリムイ」は川上に銀の矢を放つたので、川の水はきれいな水に戻った。すると、逃げていた魚たちは喜んで、再び川をのぼってきた。その様子を見た「悪魔の子」は癩癩を起し、今度は「鹿の根」を絶やすために胡桃の矢で大空を射った。すると鹿たちはいなくなつてしまった。しかし、「小さなオキキリムイ」が銀の矢を放つと鹿たちが戻ってきた。その様子を見た「悪魔の子」は癩癩を起し、「小さなオキキリムイ」に力比べを挑んだ。しかし、「悪魔の子」は敗れ、地獄へと送られてしまった。——

6.3. 交差対句と考察

ここで、テキスト「この砂赤い赤い」に施された記号・下線箇所にしたがって配列すると次のようになる。

A 「悪魔の子」の出現

B① 魚たちに悪戯をしてニコニコする「悪魔の子」

② 「悪魔の子」の「悪い行い」に腹を立て、魚たちを呼び戻す「小さなオキキリムイ」

③ 癩癩を起こす「悪魔の子」

B①[˘] 鹿たちに悪戯をしてニコニコする「悪魔の子」②[˘] 「悪魔の子」の「悪い行い」に腹を立て、鹿たちを呼び戻す「小さなオキキリムイ」③[˘] 癩癩を起こす「悪魔の子」A[˘] 地獄へ追いやられる「悪魔の子」

このテキストの場合、AとA[˘]では、「悪魔の子」の出現と、地獄に送られる「悪魔の子」が対応していると解釈できる。

また、BとB[˘]については、「悪魔の子」が悪戯をする対象は「魚たち」と「鹿たち」で異なっているものの、ほとんど同じような内容が再現されている。このB・B[˘]は、一見すると並行法のようにもみることができるが、B・B[˘]の両脇にA・A[˘]があるので、並行法ではなく交差対句として解釈すべきであろう。

7. 沼貝が自ら歌った謡「トヌペカ ランラン」の場合

本節では、⑬沼貝が自ら歌った謡「トヌペカ ランラン」(以下、「トヌペカ ランラン」とする。)について採り上げる。

7.1. 「トヌペカ ランラン」の構造

以下、テキスト「トヌペカ ランラン」を引用転載する。ここでも、行頭への符番・下線・記号は筆者による。

- 1 A トヌペカ ランラン
- 2 強烈な日光に私の居る所も
- 3 乾いてしまって今にも私は死にそうです。
- 4 B 「誰か、水を飲ませて下すって
- 5 助けて下さればいい。水よ水よ」と私たちが泣き叫んで
- 6 いますと、ずっと浜の方から一人の女が
- 7 籠を背負って来ています。
- 8 C 私たちは泣いていますと、私たちの傍を通り

- 9 私たちを見ると、
- 10 「おかしな沼貝、悪い沼貝、何を泣いて
- 11 うるさい事さわいでいるのだろう。」と言っ
- て
- 12 私たちを踏みつけ、足先に向け飛ばし、貝殻
- と共につぶして
- 13 ずーっと山へ行ってしまいました。
- 14 D 「おお痛、苦しい、水よ水よ。」と泣き叫ん
- で
- 15 いると、ずっと浜の方からまた一人の女が
- 16 籠を背負って来ています。私たちは
- 17 D[˘] 「誰か私たちに水を飲ませて助けて下さ
- るといい、
- 18 おお痛、おお苦しい、水よ水よ。」と叫び泣
- きました
- 19 すると、娘さんは、神の様な美しい気高い様
- 子で
- 20 私の側へ来て私たちを見ると、
- 21 C[˘] 「まあかわいそうに、大へん暑くて沼貝
- たちの
- 22 寝床も乾いてしまって水を欲しがって
- 23 いるのだね、どうしたのでしょうか
- 24 何だか踏みつけられでもした様だが……」と
- 言いつつ
- 25 私たちみんなを拾い集めて藍の葉に
- 26 入れて、きれいな湖に入れてくれました。
- 27 B[˘] 清い冷水でスッカリ元気を回復し
- 28 大へん丈夫になりました。A[˘] そこで始めて
- 29 かの女たちの気性を探って
- 30 見ると、先に来て、私を踏みつぶした
- 31 にくらしい女、わるい女はサマユンクルの
- 32 妹で、私たちを憐み
- 33 助けて下さった若い娘さん淑やかな方
- 34 は、オキキリムイの妹なのでありました。
- 35 サマユンクルの妹は悪らしいので
- 36 その粟畑を枯らしてしまい、オキキリムイの
- 37 妹のその粟畑をばよく実らせました。
- 38 その年に、オキキリムイの妹は大そう多く収
- 穫をしました。
- 39 私の故為でそうなった事を知って
- 40 沼貝の殻で粟の穂を摘みました。
- 41 それから、毎年、人間の女たちは
- 42 粟の穂を摘む時は沼貝の殻を使う様になっ
- たのです。
- 43 と、一つの沼貝が物語りました。

7.2. あらすじ

この物語は、「沼貝の神」が主人公である。

〔あらすじ〕

——「沼貝」たちが強い日差しにさらされて苦しんでいると、そこにサマユンクルの妹がやってきた。サマユンクルの妹は、苦しんでいる「沼貝」たちをみて煩がり、足で踏みつぶしたり蹴飛ばしたりした。そこで、「沼貝」たちがさらに苦しんでいると、そこにオキキリムイの妹がやってきた。オキキリムイの妹は、苦しんでいる「沼貝」たちを拾い集め、きれいな水のなかに戻した。このこと故に、「沼貝」たちは、サマユンクルの妹の畑を枯らし、オキキリムイの妹の畑を豊かにした。また、このようなことがあったので、人間たちは、粟の穂を摘むときに、沼貝の殻を使うようになった。——

7.3. 交差対句と考察

このテキストには以下のような交差対句が確認できる。

- A 死にそうな沼貝
- B 助けを請う沼貝と近づく娘
- C サマユンクルの妹の行為
- D 沼貝の言葉
娘が近づく
- D' 沼貝の言葉
娘が近づく
- C' オキキリムイの妹の行為
- B' 助かる沼貝と去る娘
- A' その後の沼貝

まず、Aは、この物語で起こる一連の出来事の前における「沼貝」たちの様子である。「沼貝」たちは乾きで苦しんでいる。それに対して、A'には、一連の出来事の後における「沼貝」たちの様子と、「沼貝」たちによって引き起こされた事柄が書かれている。

Bには、乾きで苦しむ「沼貝」たちが助けを乞う様子と、その場所にサマユンクルの妹が近づいてくる様子が描かれている。それに対して、B'では、オキキリムイの妹に助けられた「沼貝」たちの様子が書かれている。一方、ここではオキキリムイの妹が「沼貝」たちのもとから立ち去って行く様子は書かれていない。しかし、この場面では、オキキリムイの妹が「沼貝」のもとを立ち去った

と推測できる。

Cでは、サマユンクルの妹が「沼貝」たちを煩わしく思い、「悪い行い」をする。一方で、それとは正反対に、C'には、オキキリムイの妹の、「沼貝」たちへの「良い行い」が書かれている。このCとC'に描かれた事柄は対照的である。

DとD'には、共に、「沼貝」たちが助けを乞う声と、近づいてくるオキキリムイの妹の姿が描かれている。

8. 調査の結果

『アイヌ神謡集』に掲載された13編のアイヌユカラのうち、5編のカムイユカラに確認できる交差対句を本稿では紹介した。また、本稿で示した5編(②・⑥・⑨・⑪・⑬)の交差対句における、それぞれ対応の数と、筆者の前稿で示したカムイユカラ(⑥・⑦・⑨)の交差対句における対応の数を、併せて次に示す。

カムイユカラ	対応の数
②「トワトワト」	→3対
④「サンパヤ テレケ」	→9対
⑤「ハリツ クンナ」	→7対
⑥「ホテナオ」	→5対
⑨「トーロロ ハンロク ハンロク！」	→5対
⑩「クツニサ クトンクトン」	→6対
⑪「この砂赤い赤い」	→2対
⑬「トヌペカ ランラン」	→4対

なお、『アイヌ神謡集』に掲載された13編のカムイユカラの中の残り5編(①・③・⑦・⑧・⑫)が交差対句形式を主軸的な修辞技法としているか否かについては今後調査を進めていきたい。

9. おわりに

本稿では、『アイヌ神謡集』に掲載された5編のカムイユカラに見出せる交差対句の資料を紹介した。本稿第1節で書いたように、本稿の前提は、交差対句が、アイヌ民族における特徴的な修辞表現様式一つであるということである。また、人々の心性は、容易に、言語における表現形式に反映する。このことは、アイヌの口頭資料に表出する交差対句についての知見が、アイヌの生活の中で培われてきた民族性や心性を理解する上で有用であることを示している。

また、アイヌ文化は、いわゆる「和人」の文化

に対して、基層的領域で何らかの影響を与えてきたとも言われる⁹⁾。日本の生活的な伝統を理解するためには、先住民族であるアイヌ民族との文化的な関わりを看過することができない。

今後、『アイヌ神謡集』の残りの5編についての調査と共に、本稿と前稿で得られた交差対句に現れた特徴と、アイヌの生活文化との関わりについても調べる予定である。

引用文献

- [1] 知里幸恵. アイヌ神謡集. 2004年第35刷, 岩波書店, 1978.
[2] 大喜多紀明. アイヌ女性叙事詩『スズメの酒盛り』についての考察—交差対句と心意—. アジア民族文化研究. 2012(11), p. 181-213.
[3] 大喜多紀明. 「アイヌ神謡」の修辞パターンから心意を辿る(上)—「交差対句」を糸口として—. 西郊民俗. 2011(217), p. 24-32.

- [4] 大喜多紀明. 「アイヌ神謡」の修辞パターンから心意を辿る(下)—「交差対句」を糸口として—. 西郊民俗. 2012(218), p. 25-28.
[5] 大喜多紀明. アイヌ口承文芸『ハリツ クンナ』と『パナンペ尻滑り』についての考察. 国語論集. 2012(9), p. 158-166.
[6] 上野昌之. アイヌ語の衰退と復興に関する一考察. 埼玉学園大学紀要(人間学部篇). 2011(11), p. 211-224.
[7] 遠藤匡俊. アイヌ文化と高校地理教育. 岩手大学教育学部研究年報. 2003(62), p. 175-184.
[8] 切替英雄. “アイヌの地理的認識と上(かみ)と下(しも)”. 津曲敏郎(編). 環北太平洋の言語(14), 北海道大学大学院文学研究科, 2007, p. 35-56.
[9] 埴原和郎. 二重構造モデル: 日本人集団の形成に関わる一仮説. Anthropological Science (Japanese Series). 1994, 102(5), p. 455-477.

Abstract

In this paper, five texts in “Ainu shin-yo syu” which was translated by Yukie Chiri were investigated by the author. It is interpreted that the chiasmic structure in Ainu oral literatures is one of the characteristic rhetoric expression styles. The author has judged that the data of the intersection antithesis introduced in this paper are useful knowledge for the investigations of life and culture in Ainu.

(受付日: 2012年10月11日, 受理日: 2012年10月31日)



大喜多 紀明 (おおぎた のりあき)
所属: アジア民族文化学会

修士(理学) 東京工業大学大学院総合理工学研究科.

専門: アイヌ民族の口頭資料についての研究. 現在は, 特に, 修辞論的な視点からの研究を行っている.

主な論文: 「アイヌ女性叙事詩「スズメの酒盛り」についての考察—交差対句と心意—」(アジア民族文化研究, 第11号)